

土壌調査から見た県農耕地の現状と傾向

環境安全担当 岩佐翔

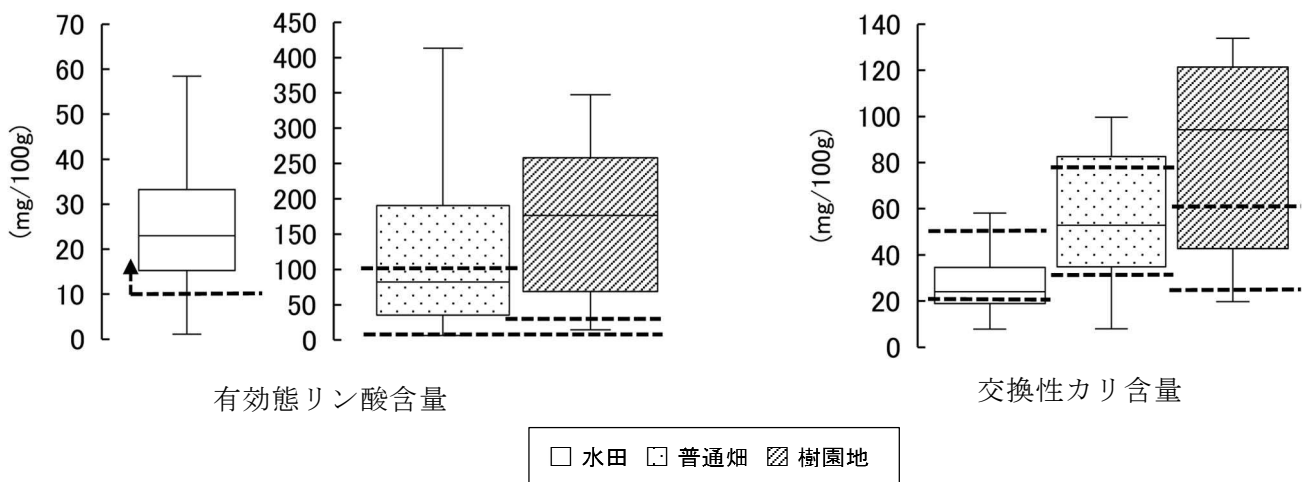
農業技術研究センターでは、農耕地土壌の特性や変化を把握し、適正な肥培管理に活用するため、県内各地の農地に定点を設け、1979年から5年で1巡するサイクルで土壌調査を継続しています。最新の9巡目調査（2019～2023年）は110地点（水田61地点、普通畑27地点、樹園地9地点、他13地点）で実施しました。

今回の調査でも、普通畑や樹園地を中心に、有効態リン酸や交換性塩基類などの項目が土壌管理目標値を外れている地点が多く見受けられました。

特に有効態リン酸や交換性カリについては、普通畑や樹園地で過剰蓄積している傾向にありました。その原因としては、かつて土壌改良を目的にリン酸やカリの多施用が推奨されていましたが、土壌改良が進んだ後も同様の施肥が継続して行われてきたことなどが考えられます。リン酸やカリ過剰は作物の生理障害等を引き起こすことがあるため、土壌の適正管理が必要です。

そのためには、作付前の土壌診断の実施が必須であり、リン酸やカリが土壌管理目標値より高い場合は、窒素単肥や、リン酸・カリの少ないL字型肥料を使用するなどの施肥改善が必要です。また、堆肥などの有機物を施用する場合は、リン酸やカリの含有率を考慮した施肥設計も重要です。さらに、こうした施肥改善の取組は、肥料価格が高騰している近年では経費削減対策にもなります。

施肥は一律同様に行うのではなく、ほ場の状態に合わせた施肥設計を心掛け、必要に応じて減肥をしましょう。



(注) 点線は各項目の適正範囲を表しており、水田は灰色低地土・CEC20me、普通畑は黒ボク土・CEC30me、樹園地は黒ボク土・CEC25me の場合を示している。

図 県内農耕地土壌の有効態リン酸および交換性カリ含量 (2019-2023 年度調査)